

殻を破る③

2024. 10. 15

「主体的な学習に取り組む態度」の評価方法に関して、授業の設計図である学習指導案には、評価規準が入っているが、実際にどのように評価するのかを記述したい。その方が、参観者がわかるし、授業者も実際に評価できるようになる。協議もしやすくなる。また、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を第○時に設定した理由を入れたい。

授業の基本的な流れとして、「学習課題 → 個人 → グループ → 全体 → 個人 → まとめ → 振り返り」がよい。個人の時間をじっくりと2回とっているところが大事である。今回の授業では、生徒は、5分+7分+5分+10分で、計27分もの間、書いたり話したり話し合ったりしていた。ずっと考えていた。それだけ、授業者の出番が多くはなかったということである。解説・説明型の授業ではなかった。“先生の押しつけ”ではなかった。生徒からすると、「先生の言うことは正しい」のである。もし、時間があり、振り返りも書いていたら、計30分になっていた。振り返りも、4段階に○ではなく、ぜひ文章で書かせたい。

学習課題と発問が授業の命である。教材研究がすべてである。『故郷』で、発問を50個つくったことがあるだろうか。思いつくままにどんどん書いていくとよい。そこから、授業で使えそうにないものを消していく。すると、どんどん消えていく。そして、最後に残ったものから発問をつくる。『故郷』の全文を視写したことがあるだろうか。国語教師として、なぜやらないのか。視写すると、読んだだけではわからなかったことに気づくことができる。『少年の日の思い出』では、「なぜちょうをつぶさなかったのか。」について考えることがよくある。読むたびに考えが変わっていく。『走れメロス』でも、読むたびに発見がある。どうして、今までは気づけなかったのかと思うことが出てくる。これらの3教材は、ずっと教科書に載っている定番教材である。そうであれば、50の発問づくりや全文視写をやってもいいのではないか。それが、授業者としての財産となるのではないか。

個人で2回書かせることがポイントである。書いたものは残る。ノートに書いたものを見て自己の変容がわかる。書くことは考えることである。書いたものが学力である。書けることが学力である。音読をすることがあるが、生徒全員に音読量を保証してほしい。数名を指名して読ませるのは、音読ではない。ワークシートを使う場合がある。ワークシートでなければならない理由があればよいが、それがないのであれば、ノートのほうがよい。ノートは“思考の運動場”である。いくらでも書ける。ワークシートの枠が邪魔である。生徒の書く量を、思考を制限してしまう。ノートを集めたら、「見ました」「よくできました」のハンコではなく、赤ペンを入れてほしい。生徒にとって、教師の赤ペンは絶対である。ときには、その赤ペンが、生徒の人生を支えることもある。机の上には、国語辞典を準備させて、いつでも引けるようにさせる。いつでもすぐに辞書を引く生徒を育てたい。

(次号に続く)